

軍国主義と反軍国主義的戦術

この問題（社会主義者の反軍国主義的戦術についての論争——青山）を正しく解決するための基本的諸前提は、はやくからまったく確固不動にうちたてられていて、意見の相違を呼びおこすものではない。現代の軍国主義は資本主義の結果である。軍国主義はその両形態において、すなわち資本主義国家がその対外衝突にさいしてもちいる武力としても（ドイツ人の言う《Militarismus nach aussen》〔対外的軍国主義〕）、また支配階級の手の中にあつてプロレタリアートのあらゆる（経済的および政治的）運動をおさえつけるのに役立つ武器としても（《Militarismus nach innen》〔対内的軍国主義〕）、資本主義の「生活現象」である。一連の国際大会（1889年のパリ大会、1891年のブリュッセル大会、1893年のチューリヒ大会、さらに1907年のシュトゥットガルト大会）は、それぞれの決議のなかで、この見解をまとめた形で表現した。軍国主義と資本主義とのこの結びつきを、もっともくわしく明らかにしているのはシュトゥットガルトの決議である。もっとも、シュトゥットガルト大会はその日程（「国際的論争について」）にしたがって、軍国主義の一つの側面、すなわちドイツ人のいわゆる《Militarismus nach aussen》（「対外的」側面）をより多くとりあつてはいるが。この決議のなかでこの点に関係のある箇所をあげよう。「資本主義諸国家間の戦争は、ふつう、世界市場でのこれらの国家の競争の結果である。なぜなら、どの国家も、販売市場を確保することだけではなく、新しい領域を手に入れようとするものであり、しかもこのばあい、他民族と他国との隷属が、主要な役割を演じるからである。そうした戦争はさらに、ブルジョアジーの階級支配と労働者階級の政治的隷属の主要な手段である軍国主義によって呼びおこされた、たえまない軍備によって生みだされる。

戦争を容易ならしめるものは、プロレタリア大衆を彼ら自身の階級的任務からそらし、彼らに国際的、階級的連帯の義務をわすれさせる目的で、支配階級の利益のために、文明諸国で系統的にはぐくまれている民族主義的偏見である。

このように、戦争は資本主義の本質そのものに根ざしている。戦争は、資本主義体制が存在しなくなるときのみに、あるいはまた軍事技術上の発展によって生じる膨大な人命と資金の犠牲と、軍備によって呼びおこされる人民の憤激とが、この制度の廃除をもたらすばあいにのみ、なくなるであろう。

兵士を主として提供し、また物質上の犠牲を主として負担させられる労働者階級は、とくに、戦争のおのずからなる敵である。なぜなら戦争は、彼らがもとめている目的、すなわち、社会主義の原則にもとづく経済体制——これは実際に諸国民の連帯を実現するであろう——をうちたてるという目的と、矛盾するからである」。……

二

このように、軍国主義と資本主義との基本的な結びつきは、社会主義者のあいだではっきりと論定されていて、この点に意見の相違はない。しかしこの結びつきを承認しても、それはまだ、社会主義者の反軍国主義的戦術を具体的に決定するものではなく、軍国主義の重荷とどうたたかい、戦争をどうして防止するかという実践的問題を解決するものでもない。そして、まさにこれらの問題にたいする答について、社会主義者のあいだにはかな

り大きな見解の不一致がみとめられる。シュトゥットガルトの大会では、そうした意見の相違を、とくに手にとるようにはっきりと、確認することができた。

一方の極には、フォルマル型のドイツの社会民主主義者がいる。軍国主義が資本主義の生みの子である以上、戦争が資本主義的発展の必然的な道づれてある以上、どんな特別の反軍国主義的活動も不必要である、と彼らは論じる。フォルマルは、エッセンの党大会でまさにこう言明したのである。そして宣戦が布告されたばあいに、社会民主主義者はどうふるまうべきかという問題では、ベーベルとフォルマルを首脳とするドイツ社会民主主義者の大多数は、社会民主主義者は自己の祖国を侵略から防禦しなければならず、「防衛」戦争に参加する義務をもつという立場を、頑として固守する。この立場の結果、フォルマルはシュトゥットガルトで、「どんな人類愛も、われわれがよきドイツ人であることを妨げることはできない」と言明し、社会民主党議員ノスケは、帝国議会で、ドイツに戦争がしかけられたばあいには「社会民主党員はブルジョア政党におくれをとることなく、銃をになうであろう」と言明した。ここからノスケが「われわれはドイツができるかぎり武装することをのぞむ」と声明するには、一步をあますにすぎなかった。

他の極には、エルヴェを支持する少数のグループがいる。エルヴェ派はこう論じる。プロレタリアートは祖国をもたない。したがって、どの戦争もすべて——資本家の利益のためにおこなわれる。したがって、プロレタリアートはどの戦争にも反対してたたかわなければならない。あらゆる宣戦布告にたいしてプロレタリアートは、軍事的ストライキと蜂起でこたえなければならない。反軍国主義的宣伝は、主として、まさにこれに帰着しなければならない。だからシュトゥットガルトでエルヴェは、つぎのような決議草案を提出した。……「大会は、どこから発せられたものであろうとあらゆる宣戦布告にたいして、軍事的ストライキと蜂起でこたえるように勧告する」と。

これが、この問題で西欧社会主義者の隊列に見られる、二つの「極端な」立場である。そこには、西欧の社会主義プロレタリアートの活動にあいかわらず害をおよぼしている二つの病気——一方では、日和見主義的傾向と、他方では、無政府主義的空文句——が、「小さな水玉に映る太陽」のように、反映している。第一に、愛国心について若干述べたい。「プロレタリアは祖国をもたない」ということは、実際に『共産党宣言』に言われている。フォルマル、ノスケの一派の立場が、国際社会主義運動のこの根本命題と「まっこうから衝突する」こと、これもまたそのとおりである。しかしこのことから、プロレタリアートがどんな祖国に住んでいようと、——君主制のドイツであろうと、共和制のフランスであろうと、あるいは専制のトルコであろうと——彼らにはどっちでもかまわない、というエルヴェやエルヴェ一派の主張が正しいということにはならない。祖国、すなわちあたえられた政治的、文化的および社会的環境は、プロレタリアートの階級闘争におけるもっとも強力な要因である。そこで「祖国」にたいするプロレタリアートの「生粋のドイツ人的な」態度とかいうものをきめているフォルマルが正しくないとしても、プロレタリアートの解放闘争のこのように重要な要因に、ゆるしがたいほど無批判的な態度をとっているエルヴェもまた、それにおとらず正しくない。プロレタリアートは自己の闘争の政治的、社会的、文化的諸条件に、無関心な、無頓着な態度をとることはできない。したがって、彼らの国の運命にも無関心ではいられない。しかし国の運命が彼らの関心をひくのは、それが彼らの階級闘争に関係をもつかぎりではにすぎず、社会民主主義者が口にしては

まったく不体裁なブルジョア的「愛国心」とかのためではない。

もう一つの問題——軍国主義と戦争にたいする態度の問題は、もっと複雑である。エルヴェが、これら二つの問題をゆるしがたいほど混同していること、戦争と資本主義との因果関係をわすれていることは、一見しただけであきらかである。エルヴェ派の戦術をとるならば、プロレタリアートは、無効果な活動をする運命をおわされるであろう。すなわち、プロレタリアートはそのいっさいの戦闘準備（蜂起がうんぬんされているではないか）を、原因（資本主義）を存続させたまま結果（戦争）とたたかうために使用することになるであろう。

無政府主義的な考え方は、ここで完全にさらけだされている。あらゆる *action directe*〔直接的働きかけ〕の奇蹟的な力の盲信、一般的な社会政治的情勢をすこしも分析しないでその一般的情勢のなかからこの「直接的働きかけ」をつかみだそうとしていること、一言でいえば、「社会現象にたいするほしいままな機械的理解」（カ・リープクネヒトの表現によれば）は、自明である。

エルヴェの計画は「きわめて単純」である。すなわち、宣戦布告の日に社会主義者の兵士は脱走し、一方予備兵はストライキを宣言して、家にじっとしている。けれども「予備兵のストライキは、消極的な抵抗ではない。労働者階級は、まもなく公然たる抵抗へ、蜂起へ、うつるであろう。しかもこの蜂起は、出征軍が国境にあるという事情によって、勝利におわる見込みがますます多いであろう」（G・エルヴェ『彼らの祖国』）。……

これが、その「現実的、直接的、実践的な計画」であって、その成功を確信しているエルヴェは、あらゆる宣戦布告にたいして軍事的ストライキと蜂起でこたえるように提案している。

ここからあきらかなように、ここでは問題は、プロレタリアートがそれを目的にかなったものとするばあいには、宣戦布告にストライキと蜂起でこたえてもよいかどうか、という点にあるのではない。論争は、**どの戦争にたいしても蜂起でこたえるという義務でプロレタリアートをしぼるべきかどうか**、ということについておこなわれている。問題を後の意味で解決することは、決戦の時機を選択を、プロレタリアートからうばってこれを敵にわたすことを意味する。プロレタリアート一般の社会主義的意識が高く、彼らの組織が強固で、きっかけが有利な等々のときに、彼らが自己の利益にそうように闘争の時機を選択するのではない。そうではなくて、条件がプロレタリアートに不利なときでさえ、たとえば、住民の広範な層のあいだに愛国主義的、排外主義的感情を呼びおこす恐れがとくにつよく、したがってまた蜂起したプロレタリアートを孤立させるような戦争を宣言することによって、ブルジョア政府はプロレタリアートを挑発して蜂起をおこさせることができるであろう。さらに見おとしてならないことは、君主制のドイツをはじめとして共和制のフランスや民主主義的なスイスにいたるまで、ブルジョアジーは、平時でも反軍国主義的活動をきわめてきびしく追及しているが、——戦争のばあい、戦時法、戦時条例、戦時軍法会議等々の発動する時機には、軍事的ストライキのあらゆる試みに、おなじような狂暴さで、おそいかかるであろうということである。

エルヴェの考えについて、「軍事的ストライキという考えは、『りっぱな』動機にうごかされて生まれたものであって、それは高潔で英雄精神にみちているが、しかしそれは、英雄的愚劣である」とカウッキーが述べたのは正しい。

プロレタリアートは、もしそれが目的にかなっていて、適切であると考えたら、宣戦布告に、軍事的ストライキでこたえてもよい。社会革命をなしとげるための他の手段とともに、軍事的ストライキにも訴えてよい。だが、この「戦術的処方箋」で自分をしぼるのは、プロレタリアートの利益にはならない。

この論争問題にたいして、シュトゥットガルト国際大会は、まさにこうこたえたのである。

第 15 卷 P178~183 『好戦的軍国主義と社会民主党の反軍国主義的戦術』

『プロレタリアー』第33号、1908年7月23日（8月5日）

ポイント

現代の軍国主義は資本主義の結果である。軍国主義はその両形態において、すなわち資本主義国家がその対外衝突にさいしてもちいる武力〔対外的軍国主義〕としても、また支配階級的手中にあってプロレタリアートのあらゆる（経済的および政治的）運動をおさえつづけるのに役立つ武器〔対内的軍国主義〕としても、資本主義の「生活現象」である。

戦争は資本主義の本質そのものに根ざしている。戦争は、資本主義体制が存在しなくなるときのみに、あるいはまた軍事技術上の発展によって生じる膨大な人命と資金の犠牲と、軍備によって呼びおこされる人民の憤激とが、この制度の廃除をもたらすばあいにも、なくなる。だから、戦争と資本主義との因果関係をわすれて、原因（資本主義）を存続させたまま結果（戦争）とたたかうことはできない。

したがって、軍国主義の現れ「憲法9条の破壊」に対して、一般的に平和の危機として訴えるだけでなく、現代日本資本主義の意図を事実にもとづいて暴露しなければならない。

社会主義者の目的は資本主義を終わらせることであり、ストライキと蜂起はプロレタリアートがそれを目的にかなったものと考えればあいに、プロレタリアート一般の社会主義的意識が高く、彼らの組織が強固で、きっかけが有利な等々のときに、彼らが自己の利益にそのような時機を選んで決定されなければならない。